

「社会学的テキスト」としての SF 文学の可能性

——「時間の社会学」の観点から読む『所有せざる人々』——

菅 原 祥

要 旨

本稿が試みるのは「SF の社会学」という新たな試みに向けた第一歩である。それは、SF 文学を一種の社会学的テキストとして（あるいは、従来の社会学が苦手としてきたような領域を社会学的な考察の俎上に載せるためのヒントになるようなテキストとして）読むことを提唱する。この目的のために、本稿はアーシュラ・K・ル・グウィン（ル＝グウィン）の『所有せざる人々』（1974）を「時間の社会学」の観点から詳細に読解し、この作品が社会学における時間に関する議論にどのような新たな視点を付け加えることができるかを検討することで、SF が社会学にどのような貢献をなしうるかを考察する。

考察の結果、SF 文学には「時間の社会学」に対して以下のような有効性があることが示唆された。第一に、「異化の文学」としての SF 文学は、その最良の場合において「他なる時間のあり方」への想像力を喚起する。そこにおいて SF 文学は、物理学や生物学の知見を取り入れることによって「社会的時間」という社会学用語が含意する人間中心主義の独善を免れることが可能なのであり、それによってさまざまな存在レベルの時間を相互に横断し結びつけるような社会理論へと思考を媒介していくことが可能である。第二に、SF 文学は、このような「他なる時間のあり方」をさらに「人間の時間」へと再び差し戻し、翻訳しなおすことによって、人間と「未来」との関わりの有り得べき可能性の探求を可能にしている。そこにおいては現実に対するユートピア的な改変可能性の力を有する「未来」のあり方が示唆される。ここに、「未来」通じて現在を批判的に考察する文学としての SF 文学の強みがある。

キーワード：SF、時間の社会学、ユートピア、『所有せざる人々』、アーシュラ・K・ル・グウィン

1 はじめに

本稿は、SF 文学を社会学的テキストとして読む試みである。社会学という学問においてなぜこのような試みが必要であるのか、まず考えてみたい¹⁾。

社会学という学問が「近代の自己認識の学」として発展してきたという言い回しは、もはや使い古された感もあるが、他方文学の領域においては、SFこそが「近代の自己認識」のための文学形式だったと言っても過言ではないだろう。文学理論家の D. スーヴェインの説明によれば、SF（そしてそのサブジャンルたるユートピア文学）とは何よりも「認識異化」の文学である。それは、作者にとっての経験的現実とはラディカルに異なった想像的枠組を描くことによって、この経験的現実を見慣れぬものにし新たな視点から見ることを可能にすると同時に、現実の規範的体系に支配された世界とは異なる「もうひとつの世界」の可能性を示唆する。そうした異化作用は、SF がその作品内で導入する「新事象」（すなわち、われわれの現実規範から著

しく逸脱した何らかの現象もしくは関係)によってなされるが、その新事象に裏付けを与えているのが、SFにおいて用いられる科学的認識の方法論にはかならない。こうして、SF文学においては科学的認識によって裏付けられた新事象が現実とは異質な「選択できるオルタナティブな現実」を作り出し、そしてこのもうひとつの現実がわれわれにとっての経験的現実へと(暗黙のうちに)フィードバックされる。それによってわれわれは、自分たちの身の回りの現実を新たな、そしてより自由な視点から考察する可能性へと開かれていくのである(Suvin 1979=1991)。このように考えると、SFとはまさに近代の科学的・認識的自己意識が自らの社会をどのようにとらえ、またその先にどのような可能性を見出してきたかという問題を一貫して反映してきた、すこぶる批判的・自己言及的な文学ジャンルなのであり、「近代の自己認識の学」たる社会学が学ぶべきところは大いにあるはずである。

とりわけ社会学にとってSFが重要だと思われる理由として、SFがその誕生以来一貫して、近代における「時間と空間」の変容という、社会学にとって決定的に重要な問題系と関わりをもってきたということが挙げられる。科学技術の進歩(タイムマシン)による時間と空間の変容を描いたH. G. ウェルズの『タイム・マシン』(Wells 1895=1965)のような最初期の古典SF作品から、人類とは全く異なる時間認識を持った異星生物と人間のコミュニケーションを描いたT. チャン「あなたの人生の物語」(Chaing 2002=2003)のような現代SFの最先端に至るまで、「時間と空間」は一貫してSFが取り上げてきた重要なテーマであり続けたと言っている。他方社会学において、時間と空間という問題が(それが社会学にとって決定的に重要であるにも関わらず)しばしば等閑視されてきたという指摘は、多くの社会理論家によってなされているところである(例えばUrry 1995=2003: 6-7)。時間に関して言えば、B. アダムが述べるように、社会学の誕生以来、量としては相当数の研究が蓄積されているにも関わらず、何故か時間というテーマは社会学の中で一貫して無視された、欠落した領域であるという感覚も非常に根強い(Adam 1990=1997: 23)。おそらく、時間を含めあらゆる現象を「社会的事実」として捉え考察の対象とする「社会学主義」を標榜してきた社会学という学問にとって、物理学や生物学などの明らかに「社会」から独立して存在する多様な領域の知見を考慮に入れなければならない「時間と空間」というテーマは、きわめて扱いづらいものだったということもあったのではないだろうか。アダムが指摘する通り、時間という極めて多岐にわたる、複雑な現象を理解するためには、物理学、生物学、社会学といった、多くの学問領域の境界を横断し、それらを結びつけるような理解が不可欠なのである(Adam 1990=1997: 71-77)。このような社会学の弱点に対し、SF文学はその誕生以来、物理学や生物学、量子力学をはじめとした自然科学の最新知識を取り込みつつ、それらが我々の生きるリアリティをどのように再編しうるのかという問いを、心理学、社会学、さらには文学的想像力と結びつけたかたちで考察の俎上に載せてきた文学ジャンルであるという意味で、大きな強みを持っていると言えるのではないだろうか。

社会学という学問が孕むもうひとつの弱点として、「未来」を考えるのに弱いという点が挙げ

られる。J. アーリが述べるところによれば、「社会科学は未来社会に分け入ることに消極的であり」、「ありうる未来像を展開することや分析することに対して背を向けて」しまっていたというのが、これまでの社会学における「未来」の扱われ方の現状であった (Urry 2016=2019: 15-16)²⁾。それに対してSFは、先にも述べた通り未来における「選択しうるもうひとつの可能性」としての別の現実を描くことによってわれわれの経験的現実を考察するという作業を一貫して行ってきたのであり、この点でも社会学に対して大きな強みを持っている。そして、このような観点からSFにおける未来を考える際にとりわけ重要なのが、「ユートピア」を想像するという行為が有する現実改変の力である。Z. バウマンによれば、従来の社会科学が未来というものをあくまで現在における「蓋然的なもの」the probable (起こりそうなこと、起こる確率が高いこと) という形でしか思考できないのに対し、ユートピア的思考は「可能なもの」the possible (起こりうること) というカテゴリーのもとで未来を思考し、それによってその実現へと向けた実際の行動へと人々を促すことができるという点において、大きな強みを持っている。すなわちユートピアは、未来の「もうひとつの可能性」(たとえどんなにその実現確率が小さくとも) の存在を人々に指し示すことによって、その実現に向けた人々の行動を活性化し、それによって既存の現実を改変する力を有するのである (Bauman 1976)。

2 補助線としての「時間の社会学」

こうして、本稿が試みるのは「SFの社会学」という新たな試みに向けた第一歩である。それは、SF文学を、従来の社会学が苦手としてきたような領域を社会学的な考察の俎上に載せるためのヒントになるようなテキストとして読むことを提唱する。そのような可能性の探求のひとつの試みとして、本稿ではアーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる人々』(Le Guin 1974=1986)を「時間の社会学」を考えるためのテキストとして読解してみたい。ここであえてこの「時間の社会学」という研究潮流を考察の俎上に載せる理由は、上にも述べたとおり「時間」がある意味で従来の社会学の「弱点」であると同時に、SF文学がそれを補う可能性を持っていると考えるからである。とりわけ、SFにおける時間に関する考察が、ユートピアを想像するという実践にどのようにつながっていくかを考えることは、ユートピア的思考を社会学の中に取り込む上で、大きな意味を有しているはずである。そして、ル・グインの『所有せざる人々』は、このような考察に最もよく合致する作品ではないかと考える。というのもこの作品は、未来の地球外社会を舞台とした典型的なSF小説であると同時に20世紀後半を代表するユートピア小説でもあるからであり、また、本作品の中で展開される時間論が、本作品で描かれるユートピアの意味を考える上で決定的に重要だからでもある。

(1) 鳥越の整理：時間の社会学と「近代的時間」

考察を始めるに当たって、まず導入として「時間の社会学」のこれまでの研究潮流について、本稿と関わりのある範囲内で検討してみたい。「時間の社会学」については、鳥越信吾（2015）が特に「近代的時間」との関わりにおいて詳細な学説史的整理を行っている。ここで「近代的時間」と鳥越が呼んでいるのは、近代という時代に一般的になり普遍的とみなされるようになった時間意識、すなわち、過去から未来に向かって直線をなして進み、計量可能・無限に分割可能で、いつでもどこでも均質に流れる普遍的で抽象的な時間、要は、われわれが普通「時間」という言葉を使う時に思い浮かべるあの「時間」のことである。このような時間概念を近代社会にもたらしたのはニュートンの物理学であり、また機械時計の発明であった。鳥越によれば、「時間の社会学」の学説史は、彼が言うところのこの「近代的時間」の「二段階の相対化」の過程として描くことが可能である。第1の段階は、「近代的時間」とは異なる「社会的時間」の発見である。例えばP. A. ソローキンとR. K. マートンは、純粹に量的で均質な連続としての「天文学的時間」が唯一のあり得る時間の概念化ではないと主張し、さまざまな社会においてそれとは異なる様々な「社会的な」時間の概念化のあり方（そこにおいては、月や曜日の名付け方や週の周期性などが、その社会集団固有の生活のリズムによって規定されている）が存在するというを示した（Sorokin and Merton 1937）。このように、第1段階が「近代的時間」をいわば「自然科学における時間」と同一視し、社会の中にそれとは異なる時間の概念化がありうるということを示すものだったとすれば、第2段階は、その自明視されてきた「近代的時間」もまたひとつの「社会的時間」である（すなわち、人間社会による発明物である）ということを明らかにする方向に進んだという（鳥越 2015）。

「近代的時間」を中心としてまとめられたこの鳥越の学説史的整理で明らかとなるのは、われわれのリアリティにとって、そして社会学において「近代的時間」が今なお有する圧倒的な重要性である。アインシュタインの相対性理論や量子論の知見によって、ニュートンが定式化したような普遍的で均質な時間概念は既に物理学の世界においては過去のものとなっているにも関わらず、それは依然としてわれわれの日常意識において、あるいは多くの社会学的な論考において、いわゆる「科学的な時間」「客観的な時間」と素朴に同一視されている。そのような中で、この「科学的な時間」と呼ばれるものもまた「社会的時間」である、という発見はこの上なく重要ではある。だが他方、そのようなかたちであらゆる時間を「社会的事実」へと還元してしまうような議論もまた、結局のところはその背後に暗黙のうちに前提とされるような「ほんとうの時間」を手つかずのまま放置してしまうことにつながるのではないか。事実、上で紹介した鳥越の整理における「時間の社会学」においては、アインシュタイン的時間や量子論的時間をどのように社会学の枠内で考えるのかという問いは、全く考察されることがないのである。

アダムもやはり従来の時間をめぐる社会学における同様の問題を指摘し、様々な学問的領域

を横断することによってさまざまな存在レベルの時間を相互に関連付けることを提唱する (Adam 1990=1997: 71-79)。本稿がここで検証してみたいのは、そのような関連付けのためのひとつのツールとしての文学的想像力、特にSF的想像力の可能性である。時間を扱ったSF的想像力は多くの場合、われわれの日常的リアリティを構成する「近代的時間」を出発点としつつも、物語の過程の中でそうした近代的時間を超え、それとは異なる時間へと開かれていくような契機を有している。そこにおいては、たとえばアインシュタインの時間、あるいは量子論的時間のありうる経験の可能性が描かれ、そのような可能性のもとにおいて人間というものがいかに変容しうるかに焦点が置かれている。あるいは、人間とは全く異なる時間感覚、時間概念を有する異星生物との交流によって人間の時間意識が拡張される可能性を描いたSF作品も多く存在する。そして、このような日常的な時間意識を超えていくような可能性の記述は、当然ながらわれわれにとってのユートピア的な次元のありかたをどのように考えるのかという問題へとつながっていくのである。

(2) 「未来」をどう考えるか

もうひとつここで確認しておきたいのは、上記で確認したような「時間の社会学」における「近代的時間」をめぐる議論において、特に「未来」という次元はどう捉えられており、そこにSFはいかなる貢献をなしうるのかということである。多くの論者に共通するのは、近代社会あるいは現代社会における「未来」に対する一種の虚無感、ニヒリズムの認識であり、あるいは未来の可能性がある意味において「縮小」しつつあるという感覚であり、またそれによって我々の生活がある意味で「空疎」なものになっているという指摘である。

例えば真木悠介のよく知られた『時間の比較社会学』(真木 [1981] 1997)の考察の出発点は、多くの近代人が悩まされてきた「死の恐怖」および「生の虚無」である。これら2つの近代の宿痾の根本的原因を、真木は近代的時間意識に見られる「抽象的に無限化していく時間意識」および「帰無していく不可逆性としての時間了解」にもとめている。こうした時間意識は、「有限な事物や活動との相即においてのみ表象される」ような「具象的な時間」や「くりかえされる時間」「帰無することなく現在しつづける過去」という時間感覚を持っていた伝統社会には見られない時間意識なのであり、そうした近代的時間意識から、近代特有の時間に対するニヒリズムが生まれてきたのだと真木は論じる。

このような感覚のとり方を基礎づけている時間感覚は「最終結果のみに意味がある」(「終わりなければすべてよし」!)ということ、すなわち〈未来が現在の意味である〉という感覚 (instrumentalism) である。存在の意味が、つねにそのあとにくる時間に向かって外化されているとき、ひとはつぎつぎとより遠い未来の視座から現在をみるということになる。するとどのような未来のはてにもそのさきにはかならず死があるのだから、存在の意

味も生きることの意味も総体としてむなしということになるのは、いわば必然の論理である（真木 [1981] 1997: 6）。

真木が指摘したのは、いわば古典的な近代人が宿痾として抱えざるを得なかった生の虚無感であったといえるが、近年ではこれとはいささか異なる文脈において、やはり現代社会における「未来」に関する虚無感やニヒリズムが指摘されることがある。そこにおいて共通して論じられるのは、「現在」と「未来」の区分があいまいになり、未来がある意味で現在に侵食されるという現象であり、さらにそれによって「未来」という次元そのものやさらに未来に関する「展望」が縮小していく。現代社会に特有のリスク評価やリスク計算が「未来の植民地化」とでも呼ぶべき形によって未来をコントロールする技術を発達させていることは A. ギデンズなどが指摘しているし（Giddens 1991=2005）、H. ノヴォトニーもまた現代社会においては開かれた未決定の領域としての「未来」というカテゴリーが廃止され、かわりにコントロール可能な「拡張された現在」に過ぎないものによって置き換えられつつあると論じる（Nowotny 1988: 26-27）。日本の文脈においては若林幹夫が、「失われた 20 年」を経た現在の日本社会における未来の行き詰まり、未来に対する「失見当識」を指摘している（若林 2014）。さらに B. アダムらは、かつて伝統社会において「神の領域」であった未来が近代社会においては人間がそこから富や利益を引き出すために自由に利用・搾取できる「抽象的で空虚な未来」とみなされるようになったが、そのような「空虚で開かれた未来」という観念は今や一種のフィクションにはかならないことが明らかになったと指摘する。というのも、そのようにして先人たちが自由に利用可能なものとして「彼らの未来」をさんざん利用しつくした結果、彼らにとって「開かれた未来」だったはずの「我々の現在」に生きる我々は、(気候変動や環境汚染をはじめとした) 過去からの重荷をますます背負うようになってしまったからである（Adam 2010: 366-369; Adam and Grove 2007: 13-14）。

こうした、現代社会における「未来」という次元の縮小には、当然ながら現代における「ユートピア」に関する想像力の縮小という問題が関連している。既に 1929 年の段階で K. マンハイムは、ユートピアの消滅と共に人間がますます貧弱で無味乾燥な「即物性」へと化してしまうことへの危惧を表明していたし（Mannheim [1929] 1952=1979）、またさらに時代が下って 1976 年、Z. バウマンは、「ユートピアが存在しないということ、ユートピアがもはや信じられなくなったということは、非合理主義と反啓蒙主義に道を開くものである。ユートピアの欠如が生み出すのは空虚であり、真っ暗で底のない深淵である」と書いている（Bauman 1976: 36）。冷戦の終結と東側の社会主義体制の崩壊によってマンハイムやバウマンの時代よりもさらにユートピア的想像力が縮小・衰退した現在、新たな形でユートピア的想像力を再評価し社会的分析の中に取り込むことは、現在の社会学にとって喫緊の課題ではないだろうか。

(3) 時間の社会学からユートピアへ

では、SF文学のテキストは上記で論じたような未来に対するニヒリズムや未来の縮小、ユートピアの縮小に対してどのようなオルタナティブを提供することができるのだろうか。それを考えるためには、SF文学のテキストにおいて「未来」というものがどのような存在様態のもとで描かれているのかということを、深く考えてみる必要がある。

重要なのは、SFにおける「未来」とは、先に挙げたような「未来へのニヒリズム」や「未来の縮小」を促しているような、いわゆる通常の（科学的な）「未来予測」とは根本的に異なるあり方をしているということである。もっとも一見したところ、SFにおける未来とは、まさにそのような科学的な未来予測を出発点としているかのようにも見える。それは、真木が「生の虚無」を生み出す原因として論じたような「抽象的に無限化していく時間」の延長線上にあるものである。すなわち、現在から連続的に時間を延長していった先にその出現が蓋然的に予測される、現在との関係性において「換喩的」なものとしての未来社会である（真木 [1981] 1997）。SF論においてはこのような未来予測のことを「外挿法」（extrapolation）と表現することがあり、これはしばしばSF文学における基本的な思考法のひとつであるとされる。だが、D. スーヴィン（Suvín 1979=1991）はこうした「外挿」論に対して疑問を呈し、実はこれまで書かれた優れたSF作品の多くは「外挿」ではなく現代社会との「類似」（アナロジー）によって未来社会を描いているのではないかと主張する。再び真木（[1981] 1997）の表現を借りるとするなら、そこに登場する未来は現実に対して「隠喩的」な関係にある未来、現実の時間と並行して、あたかもその現実を「うらうち」するかのように存在している「もうひとつの時間」、現在の現実の隠れた本質を何らかの形で明らかにする「神話的」時間である³⁾。そこにおいて未来社会は、単に将来その出現が予測されるようなものというよりは、むしろありうるもう一つの別の社会のあり方として描き出されていたり、あるいは、現代社会に対する一種の風刺として描かれていたりもする⁴⁾。スーヴィンが指摘するように、外挿に基づいたSFが多くの場合テクノクラシー的・保守的であるのに対し、類似に基づいたSFが描くのは開かれた未完状態としての未来なのであり、そこにおいては「未来がどうなるのか」ということについての最終回答は避けられている（Suvín 1979=1991）。ここに存在するのはまさに、現実に存在する社会秩序とは異なる「もうひとつの現実の可能性」を提示する「ユートピア文学」としてのSF文学の可能性なのである⁵⁾。

こうして、SF文学に描かれる「未来」は、われわれを取り巻く「現在」（現実社会）との関係性において独特の立ち位置を有している。またそれは、従来の社会学的思考の限界を超えるとともに、多くの論者によって指摘される「未来の閉塞状況」に対して、ひとつのオルタナティブな可能性を提示しうるものである。なぜなら、SFにおける未来とは、現在の社会モデルを未来に向けて演繹的に延長していった先に蓋然的に現れる「こうなるであろう」未来、バウマン（Bauman 1979）の言うところの「蓋然的な未来」ではなく、むしろ「こうもありうる」未

来、隠喩としての、あるいは「可能性」としての「未来」だからである。

3 『所有せざる人々』：時間の社会学とユートピアの社会学の観点から

以上の観点をまとめておこう。本稿は、SFにおける時間、未来社会、特に(広い意味における)ユートピア的未来社会の描写に着目することで、社会学的思考における「時間」「未来」そして「ユートピア」というカテゴリーに関して新たな視点を提供することを目的としている。このような観点から、本稿では前述したとおりアーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる人々』(Le Guin 1974=1986)⁶⁾を、こうした示唆を与えてくれるテキストの一例として読みたい。

まず、『所有せざる人々』のあらすじと構造を確認しておこう。この小説は、ル・グインの小説群の中で一般に「ハイニッシュ・ユニヴァース」と呼ばれる未来史シリーズに属する作品の一つである。このシリーズの世界観においては、地球(テラ)をはじめ人類が生息する惑星が宇宙に数多く存在するのだが、それら宇宙に散らばる人類の存在はすべて、はるか昔に共通の祖先である「ハイン人」と呼ばれる始祖人類が地球を含む宇宙各地の惑星に植民を行った結果であるとされる。だがやがてハイン人の文明は衰退し、地球を含むこれら無数の植民惑星は元の文明から切り離されてそれぞれ独自の進化を遂げることになった。本書の舞台となるタウ・セティ星系の二重惑星・ウラスとアナレスもそうした大昔にハイン人の植民が行われた人類世界のひとつである。本書の舞台となる時代には、文明を再興したハイン人およびテラ人の宇宙船が数十年前にウラスに出現し、ウラスと外交関係を樹立しているという状況である。

このタウ・セティ星系の二重惑星のうち、緑豊かで気候の穏やかなウラスには古代から人類が住んでいたが、ウラスにとっての「月」であり、荒涼とした砂漠地帯が広がるアナレスは人類の生育には適さず、鉱山資源発掘のためのコロニーがわずかに存在するのみであった。だが、ライア・アシエオ・オドーという女性を創始者とする「オドー主義者」と呼ばれるアナーキストの集団が150年ほど前にウラスで勢力を増したことから、彼らの存在に危機感を覚えたウラスの権力者たちは、オドー主義者にアナレスをまるごと与えることを決定する。以後、150年間にわたって、アナレスでは極度に過酷な自然環境のもと、オドー主義の教えに基づいた完全なアナーキスト社会が運営されていた。主人公シェヴェックは、アナレス生まれの物理学者だが、今、世界を根本的に変える可能性のある自らの「一般時間理論」完成のために、アナレスのオドー主義社会誕生以来はじめてアナレスからウラスへと旅立とうとしていた。この、シェヴェックのウラスへの旅とそこでの滞在を描いた現在パート(奇数章)と並行して、幼年期から様々な苦難を経て最終的にウラス行きを決意するまでに至るまでのアナレスにおけるシェヴェックの半生を描いた過去パートが描かれる(偶数章)。それぞれのパートにおいて、シェヴェックがウラスで滞在するア=イオという国家(爛熟した階級主義的資本制社会)およ

びそれとは対象的に荒涼とした砂漠の惑星で、物質的には貧しいものの完全なる平等と私有財産の廃止、そして個人の絶対的自由が実現しているアナレス社会のあり方が、シェヴェックの目を通して描かれる。こうして、この小説はシェヴェックを主人公としたビルドゥングス・romanであると同時に、アナレスというアナキスト社会のありかたを描いたユートピア小説でもある。

(1) ユートピアとしてのアナレス

では『所有せざる人々』において、このアナレスというユートピアはどのように描かれているのだろうか。ここで重要なのは、本書において描かれるユートピアの位置づけが、いわば「静態的」ユートピアではなく「動的」なユートピアであるということである。以下、詳しく説明してみたい。

本書をユートピア小説として見た場合、一見本書の構造はごくオーソドックスで、トマス・モア以来の典型的ユートピアの構造をなぞっているかに見える。すなわち、本書には「ウラス」と「アナレス」という2つの惑星が登場するが、これらのうちウラスは我々の住む現実の（20世紀後半の）地球の寓意に他ならない。そこでは、階級主義的資本主義社会である「ア=イオ」と、中央集権的社会主義国家である「スー」の二大国が覇を競い合っている。本書冒頭に掲げられたウラスの世界地図における位置関係を見ても、ア=イオが西ヨーロッパ（およびアメリカ）の、スーがソヴィエト連邦の似姿であることは明らかである。他方、これら2国とは別の大陸の南半球に存在し、「しょっちゅう革命を起こしている」「一種の後進国」（TD: 110）であると評される「ベンビリ」は、これら二大国の代理戦争の舞台として軍事介入を受ける存在であり、第三世界諸国、とりわけ（本書執筆当時の）ラテンアメリカ諸国を彷彿とさせる。

これら3カ国は、トマス・モアの『ユートピア』においてユートピア国の記述に先行する3つの国、すなわちポリレロス人、アコーラ人、マカリア人の国々と同じ役割を果たしているように見える（More 1516=2011: 42-68頁）。F. ジェイムソンが解説している通り、これらの国々はそれぞれ何らかの形で現実の社会を部分的に「改良」したものにすぎず、従ってまだ現実の世界との結びつきが残っているがゆえにユートピアとしては不十分な国々なのである。他方、完全な理想国家としての「ユートピア国」は、それが巨大な「濠」によって他の現実世界から物理的に切り離された「島」であることから分かる通り、現実世界から絶対的・全面的に切り離されることによってはじめて、真に「ユートピア」たりえているのである（Jameson 2005=2011: 69-71）。これと全く同じように、アナレスもまた、ウラスから完全に隔絶された「月」に存在する理想の「ユートピア」なのであり、それゆえにこそアナレスはこれら「地上の」国々が抱える欠点を克服した存在であるように思える。

ただし、モアの『ユートピア』と本書の類似点はここまでである。というのも、アナレスが「理想の社会」という意味での「ユートピア」とは全く呼べないということは、本書のごく最初

のほうから既に明らかであるからだ。例えば、アナレス社会では物質的に豊かなウラス社会に対する情報統制が隠然と行われている (TD: 63)。それだけであれば、アナレスはちょうど西側の情報が厳しく制限されていたソ連の似姿のようにも見えてくる。だが注意しなければならないのは、アナレスにおいてはソ連のように全体主義的国家権力が情報を検閲しているのではないということである。なぜなら、アナレスは完全なアナキズムが実現した社会だからであり、それゆえ誰も何からも強制されることのない社会だからであり、国家権力など存在しない社会だからである。では、誰が情報を統制しているのか? 「それじゃきみは誰がおれたちに嘘をついているというんだ」というシェヴェックの問いに対してティリンはいみじくもこう答える「誰だろうねえ、それはほかならぬおれたち自身さ」(TD: 65)。

こうして、一見完璧なユートピア社会に見えるアナレスにおいてすら、人々を抑圧するある種の「権力」や上下関係 (シェヴェックの研究成果を横取りするなどのアカデミック・ハラスメントを行うサブル)、特権 (たとえそれが自分専用の個室や食後のデザートの有無のような些細なものであっても) が存在すること、そしてそうした権力は中央集権的な国家権力から発するものではなく、むしろ人々の間に隠然と存在する「下からの権力」とでも呼ぶべきものであるということが徐々に明らかになってくる。シェヴェックの少年時代からの友人で、アナレス社会における一種の「反体制派」であるペダップはそれを「壁」と表現し、その権力の源泉を「世論」と「慣習」に求める。

「(……) 思考は抑圧によって潰すことはできない。無視することによってのみ押し潰すことができるのだ。考えることを拒否し——世の中を変えることを拒否することによってだ。われわれの社会がやっているのはまさしくそれなんだ! サブルは (……) 力できみを押さえてるんだ。その力をどこから得ているか? 既成の権威筋からじゃない。平均的な人間が心に本有する臆病さからだ。世論だよ! 世論こそ、彼が一翼を担い、その利用法を心得ている権力機構。個人の心を窒息させることによってオドー主義社会を支配している、非公認かつ公認しがたい政府——統治者なんだ」(TD: 215)

こうしたアナレス社会を支配する隠然とした同調圧力と抑圧、嫌がらせにシェヴェックは苦しめられ、サブルをはじめとした人々の妨害により彼はついにアナレスでは自由に研究ができない状況へと追い込まれていく。そして、本書の終盤、「アナレス」パート (過去パート) の最後において、シェヴェックは「壁」を打ち破るため、自らウラスへと旅立つことを決意するのであった。

他方興味深いのは、アナレスから見れば「所有主義者」が支配する「ディストピア」であるはずのウラスもまた、ときに「ユートピア」として立ち現われるということだ。ウラスが「ユートピア」として立ち現われるのは、主にその自然の美しさ、経済的豊かさにおいてであり、こ

のウラスの美しさはそれまでアナレスの荒涼たる、非人間的な砂漠の風景しか知らなかったシェヴェックをも魅了し、彼はやがてウラスを「愛するようになる」(TD: 121)。こうして、本作品においては完全なるユートピアも、また完全なるディストピアも登場しない。ここでアナレスとウラスは互いに相補的な関係にあるのであり、一方から見たユートピアは他方から見たディストピアである——ちょうど、アナレスから見ればウラスがアナレスの「月」であるのに対し、逆にウラスから見ればアナレスこそがウラスの「月」であるように (Burns 2010: 121-123)⁷⁾。

だが興味深いのは、このように「完全なユートピア」としてのアナレスが本作品の描写の中では明白に否定される一方、しかしそれでもやはりアナレスにはある種の明白な「ユートピア性」が横溢しているということは否定しようがないということなのである。いったい何がこのアナレスのユートピア性を根拠づけているのだろうか。

アナレスでは美しいものはなにもありません。なにもないが顔だけは別です。顔というのは男たち女たちのことです。われわれはなにも持っていないが仲間がいます。ここの宝石は、あそこでは瞳です。その瞳の中には輝きがあります。人間の魂の輝きです。それは男も女も自由だからです。何も所有していないからこそ自由なのです。(TD: 297)

こうして、アナレスのユートピア性を担保しているのは、アナレスの社会制度ではなく、そこに住む「人間」であるということが明らかになる。そして、本作品に登場する人間の中で、疑いなく最もユートピア的な登場人物は、主人公であるシェヴェックその人である。

だがシェヴェック自身の心の奥底には、これまでに受けた徳育や教育が彼をオドー主義者でありアナレス人に育て上げたのだという深甚な自覚があった。彼はおのれの属する社会に叛旗を翻すことはできなかった。なぜなら彼の社会は、的確に評価するならば、それ自体が一つの革命、永久的な革命であり、絶えず前進する革命の一つの過程だからである。(TD: 229)

したがって、いくらアナレスの静態的な社会構造や権力構造、秩序体系を分析しても、そこにアナレスのユートピア性の本質は存在しないということになる。

なぜなら、社会のみが保護と安定をもたらすことができるのだとはいえ、道徳上の選択力——物事を変化させる力、生活を動かす本質的な機能を有するのは個人以外の何物でもないからである。オドー主義社会は一つの永久革命であると考えられている。革命は、思考する心にこそ端を発するからである。(TD: 431)

こうして、アナレス社会を特徴づけるユートピア性はその社会制度や政治体制に由来する「静的」なものではなく、ある種の「動的」なものであるということ、そしてこのアナレスの「静的」ではない「動的」なユートピア性を担保しているのが、上の引用にも見られるオドー主義の「永久革命」のロジックであるということが明らかになる⁸⁾。そして、この永久革命のロジックにおいて重要な役割を果たしているのが、本書全体を貫く時間性の概念であり、それは物理学者シェヴェックが完成させようとしている「一般時間理論」に関わるものであると同時に、オドー主義の教えの根幹にも位置するものである。以下、この時間性の概念について考えてみたい。

(2) 時間理論とオドー主義、ユートピア

本書においては、シェヴェックが完成をめざしている「一般時間理論」なる架空の物理学理論が頻繁に言及される⁹⁾。この一般時間理論は本書のストーリー展開上の小道具として重要な役割を果たしており、また「アンシブル」という、他の「ハイニッシュ・ユニヴァース」シリーズで重要な役割を果たす「即時通信装置」の原理となっている理論でもあることが結末付近で明らかになる。だが、本書における一般時間理論の位置づけは明らかにそうしたストーリー展開上の小道具という位置づけを超えたものであり、むしろその内容が本書を貫く時間性の概念に深く関わっているという点で、重要なものである。

本書の表面的な記述を読むかぎり、一般時間理論とは「連続性理論」と「同時性理論」を統合した理論である。「連続性理論」とは、(木に向かって投げた石が無限に木に接近するだけで永遠に木に当たらない、というたとえ話によって表現されるように)均質な時間の無限的連続を基盤とする時間理論である。それが前提とするのは「線」としての時間あるいは「矢」としての時間であり、いわゆるニュートン物理学における時間観念に近いものである。先述の真木の用語を用いるならば、抽象的に無限化していく近代的時間、あるいは換喩的時間ということができる。

それに対して「同時性理論」においては時間は直線的に連続しているのではなく、むしろあらゆる時間が同時に存在している。先程の石と木の例えで言うならば、同時性理論においては石は投げた瞬間にすでに木に当たっている。連続性理論が「矢」としての時間しか考えていなかったとするならば、同時性理論においては「円環」としての時間という概念が重要な役割を果たす。これは非ニュートンの時間観念であり、相対性理論における光速の限界を否定する非連続的・非因果論的時間、量子論的時間である。あるいは再び真木の用語を用いるのならば、同時性理論が扱う時間は真木の述べた前近代的な時間意識における時間と近いものであり、すなわち隠喩的時間、神話的時間であるということができる。

そして一般時間理論はこの2つの統合である。時間は、連続して直線的に存在しているのと同時に、あらゆる時間が同時に存在してもいる。それは、手段と目的を分離しないというこ

と、原因と結果、出発と帰還をともに含んだものであると説明される。この「一般時間理論」に見られる、2つの相互に矛盾する原理を前にしてその矛盾を解消しようとするのではなく、矛盾そのものを受け入れ両者を統合するようル・グイン独特の思考法には、道教思想の影響（ただし彼女独自の解釈によるもの）およびヘーゲルやマルクスに由来する弁証法的思考の影響がしばしば指摘されるが（Burns 2010: 55-79）、本稿の議論から見て興味深いのは、ここに見られるル・グインの弁証法的思考が、B. アダムによる「直線的時間」と「円環的時間」の二項対立への批判と見事に合致するという点である。アダムによれば、時間の社会学においてしばしば見られる、前近代的時間と近代的時間にそれぞれ「円環的時間」と「直線的時間」をあてはめるような二項対立図式¹⁰⁾は適切ではない。前近代においても近代においても、時間作用はその両方を含んでおり、「直線性とともな円環性を伴うリズム性と変化が根本的」なのである。従って、一方を他方から分離することはあくまで人工的な区分、単に観測の枠組みの違いにすぎない（Adam 1990=1997: 217-225, 272-273）。この直線性と円環性が分かちがたく結びついた時間の本質が、一般時間理論においては見事に表現されているのである。

さらに重要なのが、この「一般時間理論」が有している哲学的意味合いである。というのもここにおいて、一般時間理論は「真の旅は帰還である」というオドーの言葉に象徴されるオドー主義の時間意識、さらには徹頭徹尾オドー主義者であるシェヴェック自身の人生哲学と深く関わることになるのである。ここで重要なモチーフとなるのが、再三繰り返される「旅」（出発）と「帰還」の比喩である。

彼という人間には、生涯を通じて、帰港が出航と同様に重要な意味を持つようになるだろう。出発するだけでは充分ではない。それでは中途半端に過ぎないのであって、彼は帰還しなくてはならないのだ。（……）帰還が可能であるという強固な確信がなければ、たとえそれが必ずしも彼自身の帰還を意味しないとしても、彼はあの長い年月をかけた一大研究にも、たぶんのり出さなかつただろう。これこそが、旅の本質なのだ。それは回帰を内包する地球の運行に似ている。同じ河に二度下りていってはならない。そんなことをしようものなら帰ってこられなくなる。それが彼の知っていることだった。事実、それは彼の世界観の基盤をなしていた。にもかかわらず、この、人生の無常を受容することから、彼は彼の膨大な理論を導き出したのである。この理論は、もっとも移ろいやすいものでもっとも永遠性を持つものであると提示しており、河に対する人のかかわり、また、人に対する河のかかわり及び河に対する河自体のかかわりが、単なるアイデンティティの欠如以上に複雑であると同時に確固としたものと変わると説く。人は故郷（ホーム）に帰ることができる、と〈一般時間理論〉は言明する、ただし、その故郷（ホーム）というのがかつて身を置いたことのない場所を指すということを理解するかぎりにおいてである。（TD: 76-77）

この、円環を描きながらも決して同じ出発点には帰らず、不可逆的に変化していくものとしての時間の本質に関する哲学が、不断に変化を続けていく「永久革命」という、先のオドー主義社会のユートピア的ロジックと通底していることは明らかだろう。なぜなら、永久革命としてのオドー主義社会は、ちょうど流れる河のように、固定されず永久に変化を続けるということからそのユートピア的力を汲み出しているのであり、そこにおいては「同じ河に二度下りていく」ことはすなわち社会の死を意味するからである。だからこそ、人々に希求される「故郷」＝ユートピアは、彼らがかつて身を置いたことがない場所ではないのであり、人はそのことを認識することによってはじめて真の故郷を希求できる。それは、われわれの現実とは隔絶されたここではないどこかに存在する絶対的で静的な楽園や、あるいは過去のどこかの時点に措定された始原の桃源郷への帰還を希求するような、素朴な（そして危険な）ユートピア主義とは根本的に異質なものである。それはずらされた帰郷、あるいは永遠に延期された帰郷であり、すなわち「帰還」というものが永久に不可能であるということ認識しつつもお帰還を切望するような想像力のあり方なのである¹¹⁾。

同時に、この永久革命のプロセスは、「人間の時間」というものをどのようにとらえるべきかという問題にもつながっている。それはすなわち、「現在」との関係性において「過去」そして「未来」をどのように捉えるべきかということである。ここで重要なのが人間の「記憶と意志」のはたらきである。シェヴェックはパートナーのタクヴァに対して「過去において彼の身に起きた出来事はすべて現在起こりつつあることの一部」なのであり、従って「過去と未来を記憶と意志の力で現在の一部としないかぎり、この世に人間が通れる道はないし、行き着く先もないのだ」と語る（TD: 240）。さらにシェヴェックはこうも考える。

物事の成就是一つの時間作用だ、と、シェヴェックは考える。快樂の追求は環状であり、反復性で、一時的なものである。変化を求める観客、スリルを追う者、でたらめな性関係は常に同じ場所で終わる。そこには終りがある。終わりまで来るとまた一から出直さなくてはならない。それは旅と帰還ではなく、閉じた環であり、密室であり、独房である。

この独房の外にあるのが時の風景である。精神はその風景の中に、幸運と勇気を持って、築くのだ、壊れやすい、一時しのぎの、實在せぬ誠実の道路と都市を。それは人間が住むことのできる風景なのだ。

その風景の過去と未来の中に一つの行為が果たされてはじめてそれは人間の所業となる。過去と未来が連続することを立証し、時を一つの完全なものに結合させるのは誠実さである。誠実さこそ人間の強さの根源であり、誠実さなくして善は行われぬ。（TD: 432）

これらのシェヴェックの人生哲学にはいくつか重要な論点が含まれている。まず、「環状」の

快楽の刹那的追求とここで呼ばれているもの、言葉を換えれば、真木の論じたような「原始共同体」におけるような反復の時間のあり方はここでは明確に否定されているということである。科学者であり、また「高度な文明の所産」(128)でしかありえないオドー主義の信奉者であるシェヴェックにとって、文明に背を向けて原始の幸福な共同体に逆戻りするといった素朴なユートピア主義ははじめから選択肢にならない。すなわちここでは、そうした原始共同体的時間意識から離脱した「近代的時間意識」のあり方があくまで前提にされているのである。

にもかかわらず、ここでのシェヴェックの人生哲学は、近代的時間意識が不可避的に生み出さざるを得ない「時間のニヒリズム」を乗り越えて、その先に新たなユートピア的想像力を見出しているかのように見える。ここが第二の重要な点である。この乗り越えを可能にしているのは、「過去において彼の身に起きた出来事はすべて現在起こりつつあることの一部なのだ」という認識であり、その認識によって人間は「時をひとつの完全なものに結合させる」。彼の人生を襲った多くの苦難にも関わらず、シェヴェックがシェヴェックとして生きていけるのはまさにこうした認識があるからなのである。それによって初めて、「人間が住むことのできる風景」が立ち上がる。言葉を換えれば、ユートピアを希求しようとする人間は、「誠実さ」によって「過去と未来を記憶と意志の力で現在の一部と」しなければならない。そうすることによって初めて、人間はそこに「実在せぬ誠実の道路と都市を」作り上げることができるだろう¹²⁾。

最終的にシェヴェックをウラスで保護することになるテラ人(地球人)の大使ケングとシェヴェックとの対話は、この点をより明瞭に意識させる。ウラスを「地獄」と表現するシェヴェックに対してケングは、自らの出身星である現在の「地球」を、過去の生態系の破壊によって廃墟と化した「地獄」であると表現し、それに対して現在の惑星ウラスの美しさをまるで「楽園」のようだと言望してみせる。シェヴェックはそれに対して以下のように反論する。

「あなたは時間とはどういうものかご存じない」彼はいった。「あなたは、過去とは去ったもの、未来とは実在しないもの、従って変化は存在せず、希望もまたないといわれる。アナレスは到達することのできないひとつの未来だと考えておられますね、あなたがたの過去が変えられないのと同様に。ゆえに現在のほかはなにも存在しないのだ、このウラス、この豊かで、実在する、安定した現在、今という一瞬しかないのだと。そして、それは所有されうるなにかだと考えておられる！そしていささかの羨望を感じておられる。あなた自身が手に入れたいものだと思っておられる。しかし、それは架空のものなのです。それは恒久不変のものではないのです——恒久不変のものなどこの世にはありません。物事はどんどん変化します。あなたは何一つとして持つことができないのです……なにかずく、現在を持つことはできません、現在とともに過去も未来も受け入れないかぎりにはね。過去のみではなく未来も、また、未来のみではなく過去も、です！なぜならその二つは実在するからです。それらの実在性が現在を実在させるのです。あなたがアナレスの実在

性を、不滅の実在性を容認しないかぎり、あなたはウラスを得ることはないし、理解することすらできないでしょう。(……)」

ケングは、驚きと、思慮深さと、そしていささかの困惑を顔に刻んで座っていた。「わたしにはわからない——わからない」ようやく彼女は口を開いた。「あなたは、われわれの過去から来た人のようなのです——昔の理想主義者たち、自由を夢想した人々。だというのにまるであなたが未来のことを語ろうとしているかのようにわたしにはあなたのことがわからなくなる。けれども、あなたが言われるように、あなたは今現在、ここにおられる！……」(TD: 451-453)

現在とともに未来と過去も受け入れないかぎり現在を手に入れることはできない、というこのシェヴェックの言明には、本稿で先に紹介した「未来の縮小」を乗り越え、現在というものを変えていくうえでのユートピア的想像力の決定的な重要性がはっきりと断言されている。この言明の重要性としては大きく分けて次の3点が指摘できる。まず、シェヴェックのこの言明は、Z. バウマンの議論で言われていた「可能なもの」のカテゴリーにおいて未来を考えることを可能にするということである。バウマンの指摘によれば、近代理性を特徴づける合理的・科学的思考が、既に起こったこと、実証された「事実」をもっぱら扱い、それゆえ人間の手では変えられない「蓋然的なもの」というカテゴリーによってしか未来を考察の対象とできないのに対し、ユートピアの強みは、それが「可能なもの」というカテゴリーによって未来を扱うことによって、現実を改変していく力を有しているところにある(Bauman 1976)。シェヴェックの上の言明がバウマンのこの議論と共鳴する部分を持っていることは明らかだろう。第二に、さらに重要なことだが、シェヴェックの言明において名指される可能な「未来」とは、「われわれの未来」であると同時に「他者の未来」でもあるということである。ここに、本作において「過去-現在-未来」という時間的カテゴリーが「地球-ウラス-アナレス」という空間的併置によって表現されていることの決定的な重要性がある。ここにおいては、真木の言う「近代的時間意識」において見られたような換喩的あるいは外挿的な未来意識、さらにはそこから生ずる「植民地化された未来」とは決定的に異なる未来の可能性への想像の仕方が含まれている。なぜなら、「われわれの未来」はここにおいては同時に(アナレスという)「他者の未来」なのであり、従って「われわれの現在」を未来に向かって植民地的に拡張していくのではない、未来に対するある種の脱自己中心的な態度を要請するからなのである¹³⁾。第三に重要なのは、シェヴェックがここで「未来」に加えて「過去」の重要性にも言及しているということである。ここにおいてもまた、過去は単なる「われわれの過去」ではない。それは同時に「他なる過去」なのであり、であるからこそ、現在を生きるわれわれにとって新たな想像力の源となる。そこにおいては「昔の理想主義者たち、自由を夢想した人々」の理想を、すでに失敗に終わった愚かな妄想として片付けるのではなく、現在においても決定的に重要性を持つような「他なる想

像力」として、現在においてもその実現可能性を今なお真剣に検討すべきものとして、捉え直すことの重要性が指摘されているのである¹⁴⁾。

他なる未来をわれわれの未来として想像すること、他なる過去の想像力をわれわれの想像力として受け止めること。アナレスとウラスという二重惑星はその二つの象徴にほかならない。本書『所有せざる人々』が執筆された1970年代は、冷戦構造の中、ソ連・東欧の社会主義ユートピア建設の試みが停滞を迎え、多くの人々に幻滅を与えつつあった時代であったと言えるだろう。そのような時代状況のなかでル・グインは、あくまで過去のユートピアを思考しつづけること、そして未来のユートピアを希求しつづけることを通じて、われわれが現在という時をわがものとし、変革していくことの可能性を指し示したと言えるのではないだろうか。そして、彼女が本書を書いた冷戦期当時の「現在」は、まさにわれわれにとって既に「他なる過去」となっている。だがまさにそのようなわれわれにとっての他者としての過去のなかにおいてこそ、われわれの現在を根本的に変革しようとする理想と夢が孕まれているのである。その意味で、本書において示された可能性は、現在においても全く古びてはいない。むしろ、ソ連・東欧の社会主義圏が崩壊して既に30年近くが経った「ポスト・ユートピア」(菅原2018)の現代の時代状況においてこそ、ますます多くの示唆を我々に与えてくれるように思われるのである。

4 むすびにかえて

以上、『所有せざる人々』を例として、そこにおける時間及びユートピアをめぐる思惟を「時間の社会学」の観点との比較のもと考察してきた。これまでの議論を踏まえ、以下、SF文学が時間の社会学にとってどのような貢献をなすのかを改めてまとめておきたい。

第一に、「異化の文学」としてのSF文学は、その最良の場合において「他なる時間のあり方」への想像力を喚起する。すなわち、架空の時間理論において時間はどのようなものとして捉えられうるか。人間とは全く異なる時間意識を有した、我々にとって全き「他者」にとっての時間とはどのようなものでありうるか。さらに、宇宙にとっての時間とはどのようなものか。このように、SF文学は、物理学や生物学の知見を取り入れることによって、「社会的時間」という社会学用語が含意する人間中心主義の独善を免れているのである。ここには、B. アダム(Adam 1990=1997)が要請しているような、さまざまな存在レベルの時間を相互に横断し結びつけるような社会理論にとって、そのひとつの媒介となりうるような存在としてのSF文学の重要性が確認できる。

第二に、SF文学は、このような「他なる時間のあり方」をさらに「人間的時間」へと再び差し戻し、翻訳しなおすことによって、人間と「未来」との関わりを有り得べき可能性の探求を可能にしている。そこにおいては、本稿で紹介したような「未来」に関する一連の社会学的分析において指摘されたような閉塞感やニヒリズムを免れた、現実に対するユートピア的な改変

可能性の力を有する「未来」のあり方が示唆される。ここに、「未来」を通じて現在を批判的に考察する文学としてのSF文学の強みがある。

以上、本稿はあくまで、『所有せざる人々』というあるひとつのSFテキストを中心として、SFが「時間の社会学」という社会学の一つの潮流の、しかもごく一部の議論に対してどのような貢献がなしうるかを考察したものにすぎず、その意味で本稿の議論は大きな制約つきの、ごく限定的な議論に過ぎない。だが、それを認めた上でなお、SF文学を社会学的テキストとして読む試みの可能性の一端を示すという本稿の目的は果たされたのではないか。今後の課題として、「時間の社会学」に限らず、より広い理論的観点から社会学的テキストとしてのSFの可能性を探求するという試みが残されている。本稿は、「SFの社会学」とでも呼ぶべきそのようなより野心的な試みに向けたささやかな第一歩である。

【謝辞】本研究は、JSPS 科研費 JP20H01587 の助成を受けたものです。

注

- 1) ここで、文学を扱った社会学的研究一般のなかにおける本稿の位置づけを簡単に述べておきたい。G・サピロの表現に沿って言うならば、ふつう、「文学社会学」という名のもとで文学を社会学的研究において扱う場合、「文学的事実」はある種の社会学的な研究対象（すなわち「社会的事実」）として扱われ、そこにおいては作品の生産・消費・評価をめぐる制度や個人などが関わる「社会現象としての文学」についての問い、および「文学テキストのなかに時代の表象や社会的争点がいかに刻印されているのか」についての問いが含まれるといえる（Sapiro 2014=2017: 7）。それに対して本稿の立ち位置は、もっぱらSF文学の作品テキストに焦点を当て、それが社会学理論に対してどのような新たな貢献をなしうるかを検討するという意味において、あえて言えば作田らの提唱する「文芸社会学」、すなわち、文学を「社会学にとっての対象でも素材でもなく、あえていえば社会学にもましてある種の真実を伝えている、それゆえ稔りゆたかな議論の展開のためにはたえず立ちもどる必要のある、ひとつの源泉」として捉える「文学からの社会学」の立場（作田・富永編 1984）に近い。より本稿の視点に近づけて言うならば、本稿は、SF文学を社会に関するある種の「知」や「認識」を生み出すひとつの形式であると捉える。そこにおいては例えば（自然科学、社会学、文化人類学など）他の学問分野の知識がSF文学のテキストに取り込まれる一方で、SF文学そのものはそれら他の分野とは異なる独自の枠組みと様式のもとで社会に関する知を産出するものとして捉えられるだろう（Sapiro 2014=2017: 104-106 の記述も参照）。本稿が「SF文学を社会学的テキストとして読む」というのは、そのような意味においてである。
- 2) もっとも、未来を社会学の中でどのように扱うかという問題は近年関心を集めつつある。Urry (2016=2019) の他、Adam (2010)、Adam and Groves (2007)、Schulz (2015)、Coleman and Tutton (2017) および若林 (2014) などを参照。
- 3) ただし、真木はこのような「隠喩的」時間を近代的時間意識とは対置される「原始共同体」の伝統的時間意識の特徴として捉えたのであった。真木が伝統的時間意識の特徴として論じたような時間観が、ほかならぬ近代的科学認識の申し子であるSF文学において特徴的に見られるという事実は、伝統社会および近代社会における時間意識のありかたというものを、真木（および他の「近代-前近代」図式に囚われた時間論者）が想定しているよりもより重層的・多義的なものとして捉える必要性を示唆しているのではないと思われる。後述のB. アダムによる「円環的時間-直線的时间」図式への批判も参照のこと（Adam 1990=1997: 217-225）。

- 4) ここでは一例として、最初期のSFの古典的作品であるH.G. ウェルズ『タイム・マシン』を挙げておきたい。同作のなかで、タイム・マシンに乗った主人公は時間が連続的に無限に変化していくのを目撃する(抽象的に無限化していく時間)が、最終的に主人公がタイム・マシンから降り立った世界は、「エロイ」と「モーロック」という二つの人種が対立する世界であり、現代の階級対立の寓話となっている。
- 5) だからこそ、優れたSF文学は多くの場合、真木が論じたような生の虚無感やニヒリズムを免れている。事実、SF作品の中には、既に人類が滅亡し、それどころかこの宇宙すら終焉を迎えるはるか未来を描いたものが少なくないが、そうした人類滅亡後の遠未来は、必ずしも真木の言うような虚無感を伴って描かれるわけではない。むしろそこにはしばしば、そうした虚無感を乗り越え、新たな形で人類社会とその一員である個人のあり方を問い直そうという意志が見られることが多い(例えば、新井素子の『チグリスとユーフラテス』(新井1999)などはその典型例であろう)。
- 6) アーシュラ・K・ル・グイン(1929-2018)はアメリカを代表する女性SF・ファンタジー作家で、文化人類学、哲学、政治思想、フェミニズムなどを自身の深い思索とともに作品世界に織り込んだ作風で高く評価されている。日本においても『ゲド戦記』シリーズや両性具有をテーマとした『闇の左手』などが広く知られているが、本稿で取り上げる『所有せざる人々』は、それらと並ぶル・グインの代表的長編作品であり、20世紀後半におけるユートピア文学の中でも最も重要なもののひとつとしてSF界を超えて広く評価・言及されている作品である。以下、『所有せざる人々』を参照するときは「TD」と略記した上で、ハヤカワ文庫版(佐藤高子訳)初版第6刷(1994年)の該当ページ数を記載する。訳文は基本的に佐藤訳に準拠した。
- 7) このようなウラスとアナレスの関係性に見られるル・グイン独特の弁証法的な思考法は、後述の「連続性」と「同時性」を共に含みこんだものとしての「一般時間理論」というアイデアとも共通するものである。
- 8) 『所有せざる人々』におけるユートピアの動的な性格については多くの論者が言及している。例えばL. デーヴィスはそれを「社会的コンフリクトと歴史的变化という永続的現実を受け入れることを前提とした動的で革命的なユートピア」とであると評している(Davis 2005: 3)。
- 9) 本書に登場する「連続性理論」「同時性理論」および「一般時間理論」を考案するにあたり、ル・グインはJ. T. フレイザー編の時間研究の論文を集めたアンソロジー『時の声』収録のF. キュンメル論文「継起としての時間と持続の問題」(Kümmel 1996)に強い影響を受けたとされている(Davis 2005)。
- 10) 先に紹介した真木悠介の議論もこうした二項対立図式のひとつとして挙げられるだろう。
- 11) スヴェトラナ・ボイムの表現を借りて言えば、これは「回復的ノスタルジア」に対する「反省的ノスタルジア」というノスタルジアのあり方と通底するものである(Boym 2001)。
- 12) 過去と未来と現在との関係性についての考察、特に過去と未来というものが現在において構成され現在において統合されるのだという考え方は、聖アウグスティヌス『告白』に端を発し、シュッツ、ミードらの議論を通じて既に「時間の社会学」においても馴染みのものである(Adam 1990=1997: 56-70)。ただしル・グインはここで、さらにそこに介在する「意志の力」や「誠実さ」の重要性を強調することで、単なる時間理論を超えたユートピア論を提起しているように思われる。この点に、SF文学独特の社会に対する批判的思考の強みがあると言えるのではないだろうか。
- 13) さらに言えば、このような形での未来を想像のしかたは、B. アダム(Adam 2010)が主張するような未来に対するある種の倫理的態度への媒介ともなりうるだろう。アダムは、われわれの未来に対する関わり方の2つのありかたとして、N. ルーマンらの用いた「現在未来」present futureと「未来現在」future presentの区別を導入する。アダムによれば、「現在未来」が我々にとって現在の利益のために自由に利用できる資源として未来を扱うのに対し、「未来現在」のほうは、我々の行為が未来の世代にどのような帰結をもたらすかを考慮する。それゆえ「未来現在」への想像力は、われわれをいまだ存在しない、時間的に遠く離れた他者との間の責任関係の中に置く、すこぶる倫理的な態度を要請するのである(Adam 2010: 369-370)。ここでアダムが述べる「未来現在」に対する想像力が、本稿で論じられているSF的想像力と多くの共通点を有していることは明らかだろう。なぜならその最良の場合において、SF的想像力はまさにこうした遠く離れたまだ見ぬ他者にとっての「他なる時間」と

してわれわれの「未来」を考えるからであり、そこにおいてわれわれは否応なしにそれら他者との倫理的責任・応答関係に置かれることになるからである。ただし、本稿の紙幅においてはこうしたSFの倫理的次元を深く掘り下げたゆとりはないため、今後の課題としたい。なお、従来の社会学的認識が「現在中心主義」とでも言うべきある種の自己中心性をはらんでいるという問題に関しては、鳥越(2019)もまた理論的観点から批判的検討を行っている。

- 14) 本作だけではなくル・グイン作品全般において、「未来」だけではなく「過去」(の失われた潜在的可能性)もまた大きな重要性を持っているということは、D. スーヴィンのル・グイン論 (Suvin 1975) においても指摘されている。

参考文献

- Adam, Barbara, 1990, *Time and Social Theory*, Cambridge: Polity. (=1997, 『時間と社会理論』伊藤晋, 磯山甚一訳, 法政大学出版局。)
- , 2010, “History of the Future: Paradoxes and Challenges,” *Rethinking History*, 14(3): 361-378.
- Adam, Barbara and Chris Groves, 2007, *Future Matters: Action, Knowledge, Ethics*, London and Boston: Brill.
- 新井素子, 1999, 『チグリリスとユーフラテス』集英社。
- Bauman, Zygmunt, 1976, *Socialism: The Active Utopia*, London: George Allen & Unwin Ltd.
- Boym, Svetlana, 2002, *The Future of Nostalgia*, New York: Basic Books.
- Burns, Tony, 2008, *Political Theory, Science Fiction, and Utopian Literature: Ursula K. Le Guin and The Dispossessed*, Lanham: Lexington Books.
- Chaing, Ted, 2002, “Story of Your life,” *Stories of Your Life and Others*, New York: Tor Books. (=2003, 「あなたの人生の物語」公手成幸訳, 『あなたの人生の物語』浅倉久志他訳, 早川書房, 173-279。)
- Coleman, Rebecca and Richard Tutton, 2017, “Introduction to Special Issue of Sociological Review on ‘Futures in Question: Theories, Methods, Practices,’” *The Sociological Review* 65(3): 440-447.
- Davis, Laurence, 2005, “The Dynamic and Revolutionary Utopia of Ursula K. Le Guin,” Laurence Davis and Peter Stillman eds., *The New Utopian Politics of Ursula K. Le Guin’s The Dispossessed*, Lanham: Lexington Books, 3-36.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. (=2005, 『モダニティと自己アイデンティティ: 後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, ハーベスト社。)
- Jameson, Fredric, 2005, *Archaeologies of the Future: The Desire Called Utopia and Other Science Fictions*, London: Verso. (=2011, 『未来の考古学 I ——ユートピアという名の欲望』, 2012, 『未来の考古学 II ——思想の達しうる限り』, 秦邦生訳, 作品社。)
- Kümmel, Friedrich, 1996, “Time as Succession and the Problem of Duration,” J.T. Fraser ed., *The Voices of Time*, New York: George Braziller, 31-55.
- Le Guin, Ursula K, 1974, *The Dispossessed*, New York: Harper & Row. (=1986, 『所有せざる人々』佐藤高子訳, 早川書房。)
- 真木悠介, [1981] 1997, 『時間の比較社会学』岩波書店。
- Mannheim, Karl, [1929] 1952, *Ideologie und Utopie*. Frankfurt am Main: Schulte Bulmke Verlag. (=1979, 「イデオロギーとユートピア」高橋徹・徳永恂他訳, 高橋徹編『世界の名著〈68〉マンハイム/オルテガ』中央公論社, 93-382。)
- More, Thomas, 1516, *Utopia*. (=2011, 『ユートピア』平井正穂訳, 岩波書店。)
- Nowotny, Helga, 1988, “From the Future to the Extended Present,” Guy Kirsch, Peter Nijkamp and Klaus Zimmermann, *The Formulation of Time Preferences in a Multidisciplinary Perspective: Their Consequences for Individual Behaviour and Collective Decision-Making*, Aldershot: Avebury.
- 作田啓一, 富永茂樹 (編), 1984, 『自尊と懐疑——文芸社会学をめざして』筑摩書房。

- Sapiro, Gisèle, 2014, *La sociologie de la littérature*, Paris: La Découverte. (=2017, 『文学社会学とはなにか』鈴木智之, 松下優一訳, 世界思想社。)
- Sorokin, Pitirim A. and Robert K. Merton, 1937, "Social Time: A Methodological and Functional Analysis," *American Journal of Sociology* 42(5): 615-629.
- 菅原祥, 2018, 『ユートピアの記憶と今——映画・都市・ポスト社会主義』京都大学学術出版会。
- Suvin, Darko, 1975, "Parables of De-Alienation: Le Guin's Widdershins Dance," *Science Fiction Studies* 2 (3): 265-274.
- , 1979, *Metamorphoses of Science Fiction*, New Heaven & London, Yale University Press. (=1991, 『SFの変容：ある文学ジャンルの詩学と歴史』大橋洋一訳, 国文社。)
- Schulz, Markus S., 2015, "Future Moves: Forward-Oriented Studies of Culture, Society, and Technology," *Current Sociology* 63(2): 129-139.
- 鳥越信吾, 2015, 「時間の社会学の展開——『近代的時間』観をめぐって」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究』第79号：83-97。
- , 2019, 「近代的時間と社会学的認識」『日仏社会学会年報』第30号：17-33。
- Urry, John, 1995, *Consuming Places*, Oxford: Taylor & Francis. (=2012, 『場所を消費する（新装版）』吉原直樹監訳, 法政大学出版局。)
- , 2016, *What is the Future?* Cambridge: Polity. (=2019, 『〈未来像〉の未来：未来の予測と創造の社会学』吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳, 作品社。)
- 若林幹夫, 2014, 『未来の社会学』河出書房新社。
- Wells, H.G., 1895, *The Time Machine*, London: William Heinemann. (=1965, 『タイム・マシン』阿部知二訳, 東京創元社。)

SF as “Sociological Fiction”:

Ursula K. Le Guin’s *The Dispossessed* and the Sociology of Time

Sho SUGAWARA

Abstract

This article reads science fiction (SF) novels as “sociological fictions” to offer a different perspective to conventional sociology which has a certain weakness when approaching the problem of “time and space” in modern society. This article analyses *The Dispossessed* (1974) by Ursula K. Le Guin by relating to the “sociology of time” and identify the contributions SF can make to sociological theory.

As a result, this article suggests that SF has two advantages when approaching the sociology of time: (1) SF, as the literature of “estrangement” provokes the imagination of alternative experiences of time that fundamentally differ from human experiences of time. Therefore, SF literature can avoid the anthropocentrism of conventional sociology, and mediate between various levels and modalities of time, including “social time,” “physical time,” “biological time,” and so on. (2) SF literature can also re-introduce and re-translate these alternative experiences of time into “human time.” By doing so, SF literature permits us to imagine a possible future society or utopia as a lens through which we can criticize the social reality around us.

Keywords: SF, Sociology of Time, Utopia, *The Dispossessed*, Ursula K. Le Guin